

植民地朝鮮の日本語教育：日本語による「同化」教育の成立過程

久保田，優子
九州産業大学

<https://doi.org/10.15017/2202949>

出版情報：韓国研究センター年報. 8, pp.73-73, 2008-03-28. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：





植民地朝鮮の日本語教育

— 日本語による「同化」教育の成立過程 —

九州産業大学 久保田優子

本研究では、これまで未解明であった植民地朝鮮における日本語による朝鮮人「同化」教育の成立過程の解明を目的に実証的研究を行った。それにより得られた結果は以下である。

(1) 日本語を「同化」の主な手段として位置づけた根拠

明治期内地で日本近代化のために「国民統合」の役割を担ったのは、「国語認識」であった。「国語認識」とは、日清戦争後、国家意識に基づき国語学者上田万年により提唱された「国語は国民統一力がある」という考えであった。この「国語認識」は、やがて内地教育界に浸透していき、植民地の「新日本人」を「統合」するうえでも適用されたのであった。

(2) 朝鮮人「同化」政策策定に関する内地教育世論の影響

朝鮮では、すでに併合前から、現地の日本人学務官僚は、急進的な内地教育世論と現地韓国人の反日行動との板ばさみになりながら、日本語教育正当化の論理において、内地向けには「親日化」、韓国向けには韓国人の実利面での利点を説いた「実用・処世」との二面性をもって、来る植民地化に向けた土台作りを実施していた。そして、併合後の朝鮮人教育の基本方針は、内地の修身教育強化論者の「教育勅語」案が反映され、「同化」となったのであった。ただし、併合直後の朝鮮人に「教育勅語」に基づいた内地と同様の「忠君愛国」の精神を身につけさせる「同化」は困難と判断したため、それは「将来的・理想的同化」とされ、併合直後は「現在的・現実的同化」を目標として、日本語をその主な手段として位置づけたのであった。

(3) 朝鮮人「同化」の概念

日本語教育における朝鮮人「同化」の概念は、「天皇への感謝の気持ちを持つとともに実用的な知識を身につけ、実業に就いて勤勉に働き、役人の命令に従順に従い、国家に尽すような人間」になることであった。

(4) 日本語による「同化」教育実施方法

朝鮮総督府は、教科書の記述用語及び教授用語を原則的には国語（日本語）としたが、日本語が普及していない実態に鑑み、教育の効果をより重視したため、実際には、内地教育世論で廃止が主張された朝鮮語が利用され、その意味で、日本語教育を漸進的に実施しようとした。また、日本語による朝鮮人教育方針の策定及び日本語教育の実施方法は、西洋列強を見本としたのではなく、日本独自の考案によるものであった。

今後の課題は、植民地期全体を通じた朝鮮総督府・内地の「国語認識」の追究、及び日本語教育における「同化」の構成要素の変遷の解明である。